

恋とは我心に咲出し花

——樋口一葉「闇桜」論（その二）——

峯 村 至 津 子

一 明治期の朝顔たち——「闇桜」論（その一）補遺——

「月に村くも花に風物には総て障りのありがちなれば」——『読売新聞』は、明治十三（一八八〇）年十月三十一日から、転々堂主人（高島藍泉）の筆になる「新朝顔物語」と題する記事を全六回に亘って連載した。^{1）}長崎県の豪家の一人娘お仙の、思いを寄せた男と結婚する迄の苦難の物語を「朝顔日記」の深雪にことよせて綴ったものである。冒頭に引いたのは、連載第二回（十一月二日、朝刊三面）にある文言である。

「闇桜」『武蔵野 第一編』（明治二五・三・二三 今古堂）（上）の末尾で引かれる「朝顔日記」の物語展開は、「闇桜」論（その一）^{2）}（以下、前論と略記する）で詳しく見たように、思いを通わせた男との恋を一筋に貫こうとする女主人公が、次々出来る事件に翻弄されながらも、変節しない心の強さを持つて家を出奔するなどの行動を起こし、数々降り掛

かる苦難の中、諸国流浪の果てに恋しい男と結ばれる、というものである。冒頭に引用した一節で「花に風」が付き物とされているように、この「新朝顔物語」でも、お仙の恋路には障害が立ちはだかる。下女の手引きに促されながら、心惹かれた相手に対して積極的に行動するお仙は、自分の方から恋文を送り、祭の日に或る休息所で恋慕う男と契りを結ぶ。しかし、浮き名が立ったことで両家の親の怒りを買ひ、男は勘当、お仙は親類に預けられ、手引きした下女は暇を出される。お仙は下女と二人、家出をして上京、働きながら男を捜す。下女が病に罹り、金銭を得るためにお仙が三味線を弾くといったいかにも「朝顔日記」を思わせる展開なども経て、最終的に男は父親の病をきつかけに勘当を許され、お仙を郷里に呼び戻して祝言をあげる。

「朝顔日記」と「新朝顔物語」には明らかな共通点が見られる。女主人公の方からの働きかけもあつて思いは早い段階で通じ合い恋仲になること、その後外から加わる苦難の中で男女の心が変節しないこと、最終的には結婚という大団円で幕となること、このように、物語の重要な要素が両者はびつたりと符合する。これは、「朝顔日記」と言えばこうした物語の型、というのが流通・浸透していた故であろう。

「闇桜」（上）末尾で「朝顔日記」が引用されているのは、この時代に於いて同作品が人口に膾炙していたからにほかならない。前論では、明治十年代から「闇桜」発表の明治二十五年三月迄に出版された各種の「朝顔日記」（浄瑠璃台本・草双紙・読本など）を挙げたが、それ以外にも当時の新聞を見ていくと、「朝顔日記」の上演（歌舞伎・人形浄瑠璃・素浄瑠璃）についても多くの記事を拾うことができる。⁽⁴⁾ 広告欄にも「朝顔日記」に関わる物が見られるほか、⁽⁵⁾ 本章冒頭に引いた「新朝顔物語」以外にも、当世の人物の記事を「朝顔日記」に擬えて語るものもある。⁽⁶⁾ 注（6）に引いたもののほか、次のような記事もある。『読売新聞』明治二十一年二月十四日朝刊二面には、「今朝顔」の見出しで、山形県米沢の豪家の娘おさん（十七歳）が、米沢興業中の或る歌舞伎俳優に懸想し、後を追って単身上京するが、

どこをどう探してよいか途方に暮れ、身投げしようとするところを救われる、という記事があり、同二月二十八日朝刊二面には「今朝顔の後談」として、恋心やみがたいおさんが人力車で諸方を尋ね回るさまと警察より説諭の上姉に引き渡されるという顛末が掲載されている。

こうして見てくると、「闇桜」発表の時代に於いて、「朝顔日記」とは、一筋に思い込み、それを遂げようとする、一途な女性の恋物語の象徴であったと言えるだろう。注(3)に挙げた共同研究報告書に於いて、内山美樹子氏は、「深窓の令嬢が、恋故に盲目の袖といとなり、しかも優雅な琴を弾じて「夫を慕ふ音律」^{（をんりつ）}に、恋人はもとより敵役まで心酔させ、さまざまの辛苦の末に、周囲の献身もあつて、ついに理想の恋人との恋を成就させる——メロドラマであつても、はじめじめした卑小なところがなく、可憐で新鮮な浄瑠璃「朝顔日記」は、「読本以上に、女主人公深雪に焦点を合わせた、波乱万丈の、理想の恋物語であり、ここまでロマンティックな構想は、十八世紀以来の浄瑠璃にはなかった」と述べている。⁽⁷⁾以上、「朝顔日記」は女主人公の恋に焦点を当てた特徴的な作品であり、「闇桜」発表時にも広く知られていたことから、女主人公の恋の妄執を描く本作に於いて引き合いに出されるのに妥当な作品であることが、前論以上に明確に提示できたと言えるだろう。前論では当時刊行されていた浄瑠璃正本を用いて比較したが、読本や歌舞伎と比較しても、浄瑠璃が最も女主人公の恋物語としての要素が濃いこと、「宿屋」の段で深雪が弾くのが読本では三味線だが浄瑠璃では琴であることなど(注(7)及び前論注(16)参照)から、「闇桜」の内容や(上)末尾で「朝顔日記」が引用される際に「琴」が出てくることなどと併せ見ると、一葉も浄瑠璃に拠っていると見るのが妥当であろうと考えられる。⁽⁸⁾

朝顔(深雪)及びそれに擬せられる女性たちは、自らの思いを遂げようと積極的に、闇雲に激しい行動に出る。⁽⁹⁾「闇桜」(上)末尾、物語が核心に向けて動き出す直前で「朝顔日記」が引かれるため、読者は一旦、そういう女性たちの

系譜に千代を位置づけて読もうと意識するであろう。確かに、「闇桜」は、千代の良之助に対する一途な恋心を描いた作品である。ただし、彼女は、朝顔（深雪）たちのようには、それを行動に表さない。（上）の末尾で良之助への恋心を意識するに至った千代は、続く（中）で何も表だった行動を起こすことなく、ひたすら心の中で妄想を繰り広げることになるのである。

二 朝顔からの逸脱——「闇桜」（中）・（下）を読む——

屋木瑞穂氏は、「闇桜」は千代の心に焦点を絞り、「生身の他者との対話を欠いたままに、少女の中で一方的に増幅していった「思ひの数々」を、その主観的意識に即して描き出すこと」に主眼が置かれてしていると指摘した。^⑩この見解は前論でも紹介しており、同意できるものであるが、ただ、より注意しておきたいのは、千代の物思いが根柢を欠く妄想であること、その妄想が現実を支配する力を持つこと、そしてその妄想を紡ぐ女主人公の心のありようを、先行作品との差異を見せながらドラマティックに語ろうとしていること、である。本章でその点を見ていきたい。

① 恋路の闇、空転する妄想、成就への努力の欠落

「はかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の闇」^⑪——「闇桜」（中）では、恋の闇に迷う千代の心が語り手によって語られてゆく。

千代は、「其人恋しくなると共に耻かしくつゝましく恐ろしくかく云はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと仮初の返答さへはか／＼しくは云ひも得せず」^⑫、「逢ひたし見たしなど陽はに云ひし昨日の心は浅かりける我が心我と咎むればお隣とも云はず良様とも云はず云はねばこそくるしけれ」（以上五〜六頁、論述の便宜上、右の箇所を引用部^Aとする）などと、破線部のように根柢のない思い込みを重ねてゆく。そもそも（上）で、千代と良之助の關係は「此方に隔てな

ければ彼方に遠慮もなくくれ竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず」と紹介されていたし（三頁、（中）の末尾でも、「良之助が目映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一点のにごりなければ」と語られていて（八頁、良之助の心持ちにはこの時点で一向に変化は見られず、千代のことを相変わらず可愛く思っている）、破線部のような判断は、千代の一方的な妄想と言うほかはない。ただし、その実体のない妄想はそれだけでは終わらず、引用の二重傍線部のように、千代の実際の行動を制限してゆく。つまりは、妄想が現実を動かしてゆく、という事態が生じてしまうのである。

この後、前論でも引用したように、千代が自分と良之助の結婚が不可能であることを思い悩む述懐がある。⁽¹²⁾「云ひ出して爪はじきされなん恥かしさには再び合す顔もあらじ」（七頁）と決めつけ、自分のような人間は良之助の結婚相手に相応しくなく、良之助にはもつと優れた人が似合うし、良之助自身もそう思っているだろう、恋の成就是あり得ないのだから現在の関係を保つためにも恋心を打ち明けてはいけない、と畳みかけるように思いが巡らされるが、しかし、このように悩むのも、作品全体を通して見た場合に違和感を拭えないものがある。

詳しくは前論を参照していただきたいが、「闇桜」では、千代の恋に於ける外的障害を排除しようとする意図が随所に見られる。前論では、従来の定説であった、当時の法に照らして二人の結婚が不可能であるという見方を、当時の法や判例の検討によつて見直す必要があること（即ち彼らの結婚が可能な状態にあること）を論じた。また、作品内での描かれ方（作品冒頭に両家の親密さと一体化を示す表現が置かれていること、（下）で語られる良之助の意識が、二人の結婚を可能なものと意識しているように読めること、それに加え、千代と良之助の仲睦まじい交際に対しての両家の親たちの反対が一切見られないことなど）も、二人の結婚の可能性を示唆しているように捉えられる、ということも指摘した。それらを踏まえて見ると、先の述懐もまた千代の勝手な思い込みなのであり、千代が積極的に意思

表示すれば、「朝顔日記」の二人のようにすぐに思いが成就し、さらには結婚できる可能性もあると言える。⁽¹³⁾しかし千代は、勝手な思い込みによって「今は何事も思はじ」(七頁)「よそながらも優しきお詞きくばかりがせてもぞといさぎよく断念めながら」(七〇八頁)などと断じてしまう。またそれが実体ある根拠を伴わない臆断であるからこそ、納得できる解決には至りようがなく、「聞かず顔の涙頬につたひて思案のより糸あとに戻どりぬ」(八頁)と物思いは繰り返されるしかない。

こうして千代の物思いは遂に「さりとは其のおやさしきが恨みぞかし一向につらからばさてもやまんを忘れぬは我身の罪か人の咎か思へば憎きは君様なりお声聞くもいや御姿見るもいや(中略)願ふもつられど火水ほど中わろくならばなか／＼に心安かるべし」といった極端な発想に行き着く。それを基に「よし今日よりはお目にもかゝらじものもいはじお気に障らばそれが本望ぞ」と究極の断案を下すのだが、そのそばから「隣の声を其の人と聞けば決心ゆらくとして今までは何を思ひつる身ぞ逢ひたしの心一途になりぬ」と揺らいでしまうのである(以上八頁)。

このように、「闇桜」(中)すべてを費やして、千代の逡巡する物思いが綴られる。三章構成の短編に於いて、丸々一章分が充てられていることから、この千代の妄想を描くことに重点が置かれていることは間違いない。

例えば従来「闇桜」と比較されてきた⁽¹⁴⁾同時代小説、饗庭篁村の「窓の月」『むら竹』第一巻(明治二二・七・五 春陽堂所載、一葉日記「わか艸」(明治二四・八・二)より、一葉が読んでいる可能性が高い)は、幼い頃から親しんできた隣家の梅二郎を恋慕うお仲の結婚に至るまでの話だが、お仲が梅二郎への思いをなかなか口に出せずにいるところは「闇桜」と共通するにしても、その心中が分量を割いて語られることはなく、むしろ本作は、結婚相手が学校教育を受けていることを重要視する梅二郎の結婚観に焦点が当てられ、全六回中、第三・四回、六回の三章分を割いて叙述されている。⁽¹⁵⁾一方お仲は、煩悶にのみ日を暮らすことなく、梅二郎の両親に嫁として気に入られるべく、日々家に入出入りして様々

な孝行を尽くす(第二回、四〇五頁) というように、極めて現実的な努力を怠らない。千代による成就に向けての現実的な努力が一切見られない「闇桜」との差異は明白である。

また、同じく「闇桜」との関連が指摘されてきた幸田露伴の「対髑髏」(『日本之文華』第一号、第三号(明治二三・一、二 博文館)、初出時のタイトルは「縁外縁」)は、女主人公お妙を見初め、求婚して拒否された若殿が、片恋に苦しんだ末肺病に罹って死ぬという展開であるが、その恋に苦悩する心のありようが詳しく綴られることはない⁽¹⁷⁾。そして、ここでも若殿は結婚に向けて使者を立てて求婚するといった現実的な試みをしているのであり、それがうまく運ばなかった結果、病に倒れるのであって、彼の〈恋い死に〉には、それだけの現実的根拠があると言える。

「闇桜」(中)では、最終的には「心は心の外に友もなくて」(八頁)と、孤立する千代の心が示され、それが、良之助の「我恋ふ人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちもせず」といった「淡泊なる」心と対比され(八〇九頁)、千代の心が周囲の現実から隔絶していることが強調されている。この後(下)に於いて、千代の妄想は身体の病という目に見えるかたちをとって現実を侵蝕していく。ここで注目すべきは、「闇桜」では、これ以外に何も特別な事件は出来しない、ということである。(中)に入る直前に思わせぶりに「朝顔日記」が引かれるが、外から降り掛かる苦難の中、一定不変の心が強調される「朝顔日記」と、千代が心中で繰り広げる妄想以外に何も事件が起こらない「闇桜」とは、実は大きな隔たりがあるのである。⁽¹⁸⁾ こうして見ると、(上)の末尾で「朝顔日記」をわざわざ持ち出したのは、それとの距離を示すためだったのではないかと推定される。前論では、「朝顔日記」の、〈風〉に象徴されるような偶然出来る事件によって主人公たちが翻弄される物語内容を見るとともに、「闇桜」に於ける冒頭部と結末部での「風」という語を用いての対照的な表現に着目した。作品末尾で〈風もなく散る桜〉に千代を擬しているところから、(上)冒頭部で〈風〉によって散ることを恐れていた周囲の心配をよそに、彼女が外から加わる力によって散るのではないことを

強調することによって、千代の内面を前景化しようとする意図が見て取れたが、それが明確に描かれるのが（中）の役割と言えるだろう。成就に向けての行動を何も起こさないまま、むしろ行動を起こさずすれば成就は可能であるにも拘わらず、つまりはそこに至るべき明確な根拠もないままに、千代は自らの心一つに身を委ね、〈恋い死に〉に向かうのである。

② 独自性の主張——「闇桜」（中）で引かれる古歌の効果——

前節冒頭で述べたように、（中）では恋の闇に迷う女主人公の心を語り手が語っていると一応は捉えられる（ただし（中）では、千代の身体感覚や千代の見る夢までも詳細に語るため、千代と語り手が極めて密着している感が強い）。（中）冒頭の「あやしや迷ふぬば玉の闇色なき声さへ身にしてみて」という箇所を見ても、枕詞（傍線部）や縁語（圈点部）など、伝統的修辭が用いられており、迷っている本人の冷静さを欠いた意識をそのままぞっている言葉とは考えにくい。千代の内面を語り手が再構成して語っていると考えるのが適当だと思われる。この後も、（中）では千代の心を語る際に、複数の古歌が引用される。ただし、古歌に詠まれている内容と千代の状況をただ重ね合わせるのではなく、古歌に擬えただけでは語り尽くせない千代の心の動きが語られてゆくところに特徴があると言える。

順番に見ていくと、前節冒頭近くで引いた引用部Aの後で、「涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覚えて」（六頁）と、『古今和歌集』恋二所収の紀貫之の和歌「君こふる涙しなくば唐衣むねのあたりはいろ燃えなまし」⁽²⁰⁾が引き合いに出されており、このこと自体は従来から指摘されている。⁽²¹⁾しかし、踏まえている和歌を単に挙げるだけではなく、その踏まえ方を少し詳しく見てみる必要があるのではないか。あなたが恋しくて流すこの涙がなければ、衣の胸の辺りは「思ひ」の火で赤く燃えあがってしまうでしょう、という意味のこの歌は、〈涙の水〉が〈思ひの火〉を消すという趣向であり、助動詞「まし」が用いられているように、実際に胸のあたりが燃えているわけではない。

「闇桜」は、この古歌を踏まえながらも若干のひねりを加えている。千代も「闇桜」(中)で涙を流す箇所があるが、涙の水をもつてしても思いの火は消せず、先の引用の波線部にあるように、ほんとうに胸の辺りが燃えるように思われる、というのである。傍線部では、過去の推量・伝聞の助動詞「けん(けむ)」を用いて古歌を踏まえていることを明示しつつ、そこでは反実仮想で歌われていたことを千代が現実^よに体感している、というように内容に変化を加えていると言える。ここからは、古歌に詠まれた以上の強い思いを提示しようとする意図が見て取れるのではないか。

「闇桜」では、先の引用部の後、「夜はすがらに眠られず思に疲れてとろく」とすれば夢にも見ゆる其人の面影」(六頁)と続く。先の部分ほど明確に特定の歌を踏まえているとは言えないかもしれないが、例えば岩波新大系脚注(七頁一三)に挙げられている「恋死ねとする業ならしぬば玉の夜はすがらに夢に見えつ」(『古今集』恋一、読人知らず)は、「闇桜」と内容が重なる部分があると言えるだろう。ただしこの歌は、恋しい人が一晩中夢に現れるということから、その人が自分に〈恋い死ね〉と思っているからなのか、と推量しているの^{おもひ}で、恋しい相手が歌の詠み手の思いを知っている、という意識があるからこそその発想であると言え、良之助が千代の思いに無頓着である「闇桜」とは設定に違いが見られる。「闇桜」では一方的に燃えあがる千代の思いが強調され、一方通行の恋であるが、古歌の中で仮想されていた〈恋い死に〉ということが、作品内世界で現実のものとなる。

右の箇所の後、「闇桜」では、千代の夢の中の良之助との応酬が生々しく描かれる⁽²²⁾。

隠し給ふは隔てがまし大方は見て知りぬ誰れゆゑの恋ぞうら山しと憎くや知らず顔のかこち言余の人恋ふるほど
ならば思ひに身の瘦せもせじ御覽ぜよやとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんと
すれば暁の鐘枕にひびきて覚むる外なき思ひ寐の夢鳥がねつらきはきぬくの空のみかは

ここでは『古今和歌六帖』第五、閑院の大臣の「恋々て稀にあふ夜の暁は鳥の音つらき物にざりける」を踏まえてい

る（新大系八頁脚注二三参照）。恋しくてたまらなくて、稀にあなたに逢う夜の明け方は、鳥の声が辛いものであったのだなあと、「にざりける」（「にぞありける」）に初めての気づきによる詠嘆が込められ、後朝の別れの実感が歌われている歌である。そしてここでも、「闇桜」は古歌を踏まえながらもひねりを加えていると言えるのではないか。傍線部は鳥の鳴き声（夜明け）が辛いのは後朝だけではない、の意で、これは新大系脚注でも述べられている。千代の場合、思いは成就しておらず、後朝の夜明けなど体験できるはずもない。せめて夢の中で思いを伝えようとしたのに、それすら許されない。ここには、古歌より遙かに辛い状況が提示されていると読めるだろう。

この箇所には、妄想によって現実の行動を制限してしまっている千代にとつては夢の方がリアルで、自らの思いを放出することができている、ということが表されている。夢の中では引用の波線部のように自分の思いを良之助に対して打ち明けようとしているし、夢の中の良之助も、「優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞ」と千代の顔を「さしのぞ」く（六頁）というように、千代の物思いに気付いて、破線部のように思わせぶりの言動を見せ、千代からの告白を引き出そうと働きかける。⁽²³⁾ 前論では、千代が、良之助の結婚相手として自分が釣り合うか否かを考えるということ自体が、裏を返すと、千代の中で二人の結婚が、状況が許せばあり得るものとして想定されていることを意味すると論じたが、この夢の内容も、もし自分が告白したら良之助もそれに応えるであろうことを、千代が深層では知っていることが窺われるような描き方になっている。暁の鐘に夢を破られた後の千代が、「惜しかりし名残に心地常ならず」（七頁）と語られるように、この夢での自己解放は、現実（千代の体調）に影響を及ぼす。後朝の実感が歌われている歌を引きながら、現実よりも夢の方がリアルで、現実が夢の影響下にあるといった、より複雑で皮肉な状況が示されていることになる。

このように、「闇桜」（中）では有名な古歌が複数踏まえられているが、古歌の内容と千代とを完全に重ね合わせよ

うとはしておらず、むしろ古歌を踏まえただけでは語り尽くせない、古歌の内容に収まりきらない独自の感覚が語られていると言える。例えば古歌の中で仮想されていたことが現実⁽²⁴⁾に体感されたり、より過酷な状況や複雑な状況が提示されたり、というように、古歌を引き、それとの差異を演出することによって、よりドラマティックに千代の心を語ろうとする意図が看取されるのである。前論に於いて、山田有策氏の「古歌を下敷きにした表現を前面に押し出しているため、王朝文学の単純な模倣に終わっている」「空疎な作品」⁽²⁴⁾との評言を引いたが、このように見てくると、和歌をはじめとする古典文学の素養にただ徒に寄りかかっている「単純な模倣」とばかりも言えない、作品の中の必要な効果を狙った一葉なりの工夫の跡が見て取れるのではないだろうか。例えば先に検討した『古今和歌六帖』所載の歌については、一葉の『恋百首』(明治二年四月) 歌番号六番に、「恨短夜恋」の題で、それを踏まえた「こと更に鳥が音はやく心地してまれに逢よのあけ安きかな」という歌がある。⁽²⁵⁾古歌をそのまま踏まえるだけであれば、一葉にはもともと小説以前に和歌という媒体があった。和歌に盛り込みきれない内容を描くために小説が必要とされたと言えるのではないだろうか。⁽²⁶⁾

③ 自ら散る桜——女主人公の心に潜むエネルギー——

妄想によって暴走する千代の心に焦点を当てた(中)は、「春はいづこぞ花とも云はで垣根の若草おもひにもえぬ」(九頁)という、萌えいづる若草と思いに燃える千代を重ねる文言で結ばれている。千代が良之助への恋心に気付くきっかけとなった摩利支天の縁日は「春の日もまだ風寒き二月半ば」(上 三頁)であり、作品内現在には、爛漫たる春を待つ時節に設定されていた。ここでは「春はいづこぞ花とも云はで」とあるので、未だそうした〈春たけなわ〉の時節は訪れていない、とされている。「闇桜」は、そもそも(上)の冒頭部で「ほころび初めしつぼみに眺めそはりて盛りはいつとまつ…」(二頁)と、千代という「花」(桜)の盛りを待つ、ということが基調として提示されていた。(中)

の千代は、未だ咲き誇る花には擬えられていない。千代という花は、いつ盛りを迎えるのか。花は、恋の物思いが高じてそれによって千代が衰弱死する、(下)に於いて咲いたのである。

(下)では、その冒頭から物思いによって衰弱した千代と、それを見舞う良之助のやり取りが描かれており、この時点では既に千代の思いは良之助の知るところとなっている(前論七九頁引用部参照)。千代は、「今度は所詮癒るまいと思ひます」「でも癒^よくなる筈がありませんものと果敢なげに云ひて打ちまもる睫^{まぶた}に涙は溢れたり」(二〇頁)などと、恋の物思いによって身体を蝕まれたこの状態に身を委ねようとしている。「むづかしかるべしとは十指のさす処」(同右)というほど衰弱してしまった千代に対し、「我ならぬ人見るとても誰かは腸断^{はらわた}えざらん」(同右)と述懐する良之助をはじめ、両親や使用人など、なすすべない周囲の者たちは狼狽するばかりである(二一―二三頁)。千代と良之助の恋愛の成就を阻む外的要因を排除して女主人公の心一つに焦点を絞っているのが「闇桜」の眼目であるとこれまで述べてきたが、暴走する恋の妄想は千代の身を蝕み死に至らしめるほどの強いエネルギーを持つものとして描かれている。そして、それによって周囲の人々が翻弄されるように描かれる本作では、女主人公の心に物語を動かしてゆく強い力が与えられていると言えるのであり、「朝顔日記」に代表されるような外から加わる障害や事件によって女性が翻弄される作品とは、異なるところを指摘していたと見られるのである。

(下)は、作品のタイトルの通りに〈闇の中で風もなく散る桜〉によって閉じられる。前田愛氏はこの結末を「忍ぶ恋の苦しさに悩むこの少女が軒端にこぼれる夕桜にあわせてはかなく命を終る」と要約しており、山田有策氏による小学館版全集(注(27)参照)「闇桜」扉裏解説に於いても、恋路の「闇」に自作の和歌「風もなき軒ばの桜ほろ／＼と散かと思れば暮そめにけり」の「はかないイメージが結びついた時、「闇桜」という題名が決定された」と、落花から儚いイメージを読み取っている。しかし、少なくとも小説「闇桜」に於いては、女主人公と桜が重ね合わされ、風も

なく散る桜は、風によって散らされるのではなく、自身の内にある力によって自力で散る（自らの心に身を任せ、それに殉じて死ぬ）という意味が付与されて、〈儚さ〉という類型的なイメージとは一線を画し、一見儚い美しさの中にある熱量を表現しうるものになっていると言える。

そして、一葉が、恋の妄執の中で、常識では捉え難い自らの心の動きに殉じて命を散らす千代を〈花〉（桜）という美しいものに喩えているところに、そういう女主人公を賛美する作者の意識が看取されるが、この描き方の意味については、章を改めて考察する。

三 恋とは我心に咲出し花——「随感録二」に見られる恋愛観——

これまで見てきたように、「闇桜」に於いて千代の恋愛の成就を阻む外的要素は描かれておらず、むしろ彼女が強く望めば成就は十分可能なものとして描かれていたと言える。にも拘わらず、千代は、成就を強く望んで働きかけることをせず、恋の闇〓物思いの中に閉じこもり、それに身を委ねて死に至る。そしてそうした千代を、一葉は闇の中で散る桜に喩えて描いたのだった。

（下）での千代は、良之助を見つめて涙を流し、自分のはめていた指輪を形見と称して良之助に渡し、「良さん今朝の指輪はめて下さいましたか」と問いかけ、「答へは胸にせまりて口^{くち}にのぼらず無言にさし出す左の手を引き寄せてじつとばかり眺めしが。妾と思つて下さいと云ひもあへずほろくくとこぼす涙其まゝ枕^{うつふ}に俯伏しぬ」（二二頁）などと、先行研究でも指摘されているように、この時点では自らの思いを良之助に対して目に見える行為によって示すことができていると言える。⁽²⁹⁾「闇桜」の（中）から（下）にかけて、千代が恋の成就に向けて現実的な努力をする様子は一切描かれていないが、自分の命が終わろうとしている〓現実的な恋の成就が不可能であることが明らかである状況に至つ

て初めて、自らの思いを露わにすることができるようになった様子が描かれるのは何故なのか。一葉が恋愛の問題を〈対人間〉或いは〈対社会〉との関係の中で追究してゆくのではなく、女主人公の心一つに焦点を絞って、一人で恋愛と対峙させるように描く、その背景にあるものは何か。それを考えるために、「闇桜」と同時期の一葉自身の恋愛観を見てみる。

「闇桜」と同年に書かれた日記「随感録一」（表書より明治二十五年八月起筆と知られる）の次の一節は、半井桃水との恋愛（桃水への一葉の一方的な思い）を背景に持つ文章であり、早くに鈴木三雄氏によって「闇桜」との関連が示唆されている。⁽³⁰⁾

恋とは我心に咲出し花のおのづからうるはしくたのしく清らけきものなるを物にうつしてみればその一ひらの色も香もなく成ぬ是をあやしと見て其もとを窮めんとするに茫としてしるべからず夢魂身をくるしめて心緒とくるの時なしこれを迷ひといふさればこそつれなき人に身をかこちしのお思ひに世をうらむめり詮ずる処我がうつし出たるものと形をおもはざればなり恋はもと一ツのみ何んぞ我と人とあらんや二ツなしとすればなど我思ふまゝならぬさるを猶まゝならずとするは我心より憂ふる也我なく人なく一道に帰して思へば恋はたのしくうるはしくのどかに清らかにまこと円満完了のものならずや⁽³¹⁾

右の傍線部からは、我対人（相手）という関係の中で恋愛を追求してゆくことを拒否する、逃避とも言える消極的な姿勢が看取される。これが小説執筆に反映された時、一葉の初期小説の中でも「闇桜」「たま櫛」「武蔵野」第二編（明治二五・四・一七）「経つくえ」「甲陽新報」明治二五・一〇・一八―二四、二五等）等に特に顕著な、恋愛の成就への模索を欠落させ、相手を思う気持ちのみを重んじて女主人公がそれと孤独に対峙するといった、女主人公の心一つに焦点を絞らせるといふ特徴を生んだと言えるだろう。

思いを成就させ、我と人との関係の中で恋愛を育む、といったことを排除して、我が心に生まれた恋の思いそれだけを取ってみれば、波線部に見られる如くそれは「円満完了」のものとなる。「闇桜」や「たま櫛」に於いては、右の引用部に見られるような考え方、即ち〈恋愛の相手や周囲の人々の迷惑などを考え、成就を望めばこそ苦悩が生ずる〉、〈恋の思いそのものは、それだけで美しく清く、円満完了のもの〉といった考え方に則ろうとして描かれていると言える。この一葉の恋愛観が、これらの小説に見られる〈成就に向けての女主人公の努力の欠如〉、〈恋愛の非成就〉、〈女主人公が一人で恋の思いと向き合い、それに殉じる展開〉などといった共通項を生む土壌となったと推察される。

「随感録一」の執筆は、「闇桜」「たま櫛」よりも五、六ヵ月後であり、それが、「闇桜」の先行研究の中で、この文章との結びつきに言及しているものが注(30)に挙げた鈴木氏の論以外ほとんど見られない理由であろうと推察される。⁽³²⁾しかし、日記に記される以前にそこに見られる考え方が一葉の中に生じていなかったという保証はない。内容を見比べると、「闇桜」の執筆時にも、「随感録一」に見られるような恋愛観が既に一葉の中に存在していたことが窺える。

しかし、小説は、すべて「随感録一」の主張通りに展開しているわけではない。鈴木氏の論では「随感録」と「闇桜」の違いには言及されていないが、日記に見られない要素も小説にはある。それは、恋の思いに女主人公が殉じて命をも抛つという部分である。

ただし、「たま櫛」に於いて、糸子が松野の自分への思いを知った時、竹村を含む三角関係の中で自身の竹村への恋を叶えようと努めるのではなく、面倒が起きないよう身を引きつつ自らの身の潔白を証し、竹村への思いを貫くために自決に向かう、という彼女の清々しい心の有り様は、「随感録」に限りなく近いと言える。一葉が桃水との関わりの中で何とか捻り出したのは、〈恋は自らの思う心だけで円満完了のもの〉と悟ることができる自分であった。そこに向かう過程に於いて、一葉にとってのあるべき自分、ありたき自分が、「たま櫛」の女主人公の造形に於いては、恋心

に殉じて死を選ぶ究極の形を取って表れたと言えるだろう。

だが「闇桜」の方では、千代は恋の物思いによって心身が衰弱していくように、自分一人の思う心だけで「円満完了」と悟る境地には至っていない。良之助に向かって自らの病を「癒^よくなる筈がありません」と言う時、「形見」として渡した指輪をはめている良之助の手を見た時、千代は涙を溢れさせたり「其まゝ枕に俯伏し」たりしている。「我なく人なく一道に帰して思へば恋はたのしくうるはしくのどかに清らかに」といった境地に至っていないのは明らかであり、だからこそ、夢の中や、病によって現実的な成就の道が断たれた時に自分の思いを解放して良之助に伝えようとする千代が描かれるのだろう。「闇桜」というタイトルも、恋の闇の中で（そこから抜け出せないまま）散る千代を象徴している。「闇桜」に於いては、後に「随感録」に記されたような一葉の〈ありたき姿〉に反した千代のあり方が描かれているということになる。だが、恋の迷いに蝕まれて、恋の闇の中で散る女主人公を桜という美しいものとして描いているところに、日記に書き尽くされなかった、日記の表には表れずに深層に押し込まれた一葉の秘められた願望、憧れが表れていると見ることもできるのではないだろうか。

自分一人の思いを貫いて潔く死ぬこと（たま櫛）、恋の闇から抜け出せないまま、それに身を任せて死に至ること（闇桜）、いずれにせよ自らの恋心に身を委ねる女主人公の生き方を繰り返して描いているところに、樋口夏子その人として日記に記せず現実には選べなかった生き方（死に方）が表現されていると言える。日記に記すのは〈私自身のこと〉であり、それが心の柵になることもあるのではないだろうか。千代が夢の中や病で死を目前にした時に初めて正直になれるように、自らを捕らえている、こう生きねばならないといった制約から解放放たれるには、虚構の設定・登場人物を通してでなければ描きにくいこともあったのではないかと思われる。

また、「随感録一」で主張されているような悟りの境地に至ることができない心の動きは、「たま櫛」の松野雪三の

ような、女主人公に対置される男性を通して表現されている。主家の娘系子に思いを寄せる松野は、「道に背かば背け世の嗤笑ものわらひにならばなれ、君故捨つる名真ぞ惜しからず、今日は思ふ心もらさんか明日は胸の中うち明けんか」（中の二）一九〇二頁）と成就を願い、「此心更に追へども去らず、澄まさんと思ふほど搔きにござりて、真如の月の影はいつく何処」（同右、一八頁）というように迷いの中に取り残される。こうした男性の描き方が、後期の「にござりえ」のような作品にも受け継がれていることを考えると、恋の闇から抜け出せない主人公を描いた「闇桜」は、桃水への恋心に悩むその当時の一葉を反映した一時の徒花に終わらず、その後も長く一葉の中に留まり続けるものになったと言えるのではないだろうか。登場人物の心の動き方に焦点を絞ること、女主人公の心に端を発して引き起こされることが周囲の人々を翻弄するという展開、これらは「やみ夜」以降の後期の諸作にも顕著な特色である。⁽³³⁾一葉の作家人生の中で特に明治二十八年初頭からの一年あまりは、研究史に於いて〈奇蹟の期間〉と称されるが、奇蹟は一日にして成らず、一葉後期の作品に繋がるような要素が、先行作を踏まえながらそれとの距離を見せてゆく手法なども含め、デビュー作「闇桜」の時点で既に生まれていたのである。

「闇桜」には『源氏物語』宇治十帖など平安朝の物語との関係を指摘した鈴木氏の論（注（30））や後藤幸良氏の論⁽³⁴⁾もある。また、一葉の恋愛観と透谷や露伴のそれを比較した、鈴木氏（同右）や塚本氏の論（注（13））もある。が、今回検討することができなかった。本論文に於いて見た古典和歌を小説に取り込む際の手法の他作品での様相も含め、今後の課題としたい。

＊本稿は、二〇一三年度以降の京都女子大学での「講読近代」の授業内容の一部を基にしている。

(1) 『読売新聞』朝刊、明治十三年十月三十一日、十一月二日、同六日、七日、九日、十日。本論文では、引用全般に亘り、漢字の旧字体や変体仮名を通行の字体に改め、ルビを適宜省略した。読みやすさを考慮して濁点を補い、空白を設けた箇所がある。また、特に断らない限り傍線・傍点等は論者による。

(2) 拙稿「心に吹く風——樋口一葉「闇桜」論(その二)——」『女子大國文』第一六四号(二〇一九・一・三一 京都女子大学国文学会)。

(3) 文部科学省学術フロンティア事業「アジア地域文化に関する共同研究」『朝顔日記』の演劇史的研究——「桃花扇」から「生写朝顔話」まで——』(二〇〇三・一・九「朝顔日記」の会)第五章「演博蔵歌舞伎台帳『けいせい筑紫嶽』小考」冒頭で、児玉竜一氏による、明治期の『読売新聞』に「朝顔日記」を想起させる数奇な女性の体験をめぐる「三面記事」が見られるとの指摘があり(六六頁)、示唆を得た。児玉氏は、「近代にまで至る『朝顔日記』の強靱な浸透力をまざまざと思い知らせる事例」(同右)と述べている。なお、この共同研究については、正木ゆみ氏よりご教示いただいた。

(4) 『読売新聞』では、以下のような記事が見える。明治八年九月二十五日朝刊一面(歌舞伎役者の河原崎国太郎の眼病についての記事、日本橋の中島座で「朝顔日記」を上演した際、朝顔を演じた国太郎が、その後眼が悪くなった逸話を載せる)、同十年四月二十三日朝刊三面(四ッ谷の桐座での中村寿三郎らによる「朝顔日記」上演予告、同十四年七月三十一日朝刊二面(久松座の次回演目予告に「中幕は増補朝顔日記」、朝顔を尾上多賀之丞が、阿曾次郎を片岡我童が演じるとある)、同十七年八月三日朝刊三面(市村座の夜芝居での「朝顔日記」上演予告、朝顔役は中村福助、同十八年九月二十二日朝刊三面(猿若町の文楽座の落成記事、上演演目の一つに「朝顔日記の通し」とある)、『朝日新聞』(東京)では以下の通り。明治二十三年四月六日朝刊四面(浅草「東橋亭の語り物」の七日の予告演目として「朝顔日記笑草の段」「同宿屋より大井川迄」が挙げられている)、同年五月十一日朝刊四面(本郷「若竹の語り物」、「朝顔日記笑草の段」「同宿屋より大井川迄」)、同十七年七月十三日朝刊四面(十五・十六日の日本橋友楽館での演芸改良会の演目の一つに「朝顔日記宿屋の段」、明治二十四年六月二十三日朝刊四面(開

盛座の七月狂言予告、「朝顔日記」の宿屋より大井川まで。

- (5) 『読売新聞』明治十七年四月二十日朝刊四面、春陽堂の広告に『義太夫 生写朝顔日記全一冊三十銭』とある。『朝日新聞』明治二十四年十二月八日の東京朝刊五面には、金子春夢著『今深雪』（春陽堂）の広告があり、「盲目の恋」「狂女の朝顔」「月琴を弾く」などの煽り文句が見える。参考までに、『今深雪』（『文学世界』第九巻として発行、明治二四・一一・三〇）の梗概は以下の通り。眼病により盲目となったお清は、両親の尽力によって婿養子を迎えるが、唱歌を彼女に教えるために家に入入りしていた別の男を恋するあまり夫と睦まず、怒った夫は家を出る。その後、この一件が噂となり再び婿に来る者もなく、恋慕っていた男も別の娘と結婚したことを知って「半狂乱」の状態となったお清を、世の人は「恋に身を襲す今深雪の果」（三十三裏）と噂する。この時代に、恋に執着する人の代名詞として「朝顔日記」の「深雪」が意識されていたことを窺わせる例である。

- (6) 『読売新聞』明治二十四年六月二十二日朝刊三面には「新編朝顔日記」と題する記事があり、蛭狩に毎夜出掛ける美しい女を深雪に、それを聞き伝えてその女の後をつける男たちを阿曾次郎に擬えている。この記事では「朝顔日記」の物語展開は全く説明されないし、記事の内容にも「朝顔日記」との共通点は殆ど見出せない。深雪に擬されるこの女の正体は実は「白鬼」（私娼）で、団扇で蛭を打つ拍子にわざと転んで肩につかまるといった手管で若い男を取り込もうと物色している、という落ちである。「蛭狩」（袂涼しき宇治ならで江戸川の夕暮には）といった文言も出てくる）というキーワードから、深雪と阿曾次郎が宇治川の蛭狩で出会う「朝顔日記」を思い起こさせておきながら、相手を一途に思う恋物語である同作品とは著しい落差を見せる記事を提示する。ここからは、「宇治」「蛭狩」という文言と「深雪」「阿曾次郎」という登場人物名のみで、読者に「朝顔日記」の内容を想起させることができるかと踏んでいる、ということがわかるし、この記事の内容とは対極にある誠実な恋物語の象徴として「朝顔日記」が意識されている様子が窺える。

- (7) 第一章「中国戯曲から「生写朝顔話」への流れと周縁」二〇頁。内山氏は、同論文に於いて、「そもそも浄瑠璃の時代物は、天下国家の安危に関わる壮大な物語の展開に、恋愛が織り込まれるのであって、恋愛を中心に物語が成り立つ訳ではない」が、「生写朝顔話」は「大内物」（近石春秋氏）で、刊行正本では一応時代物五段の形をとっているが全段を貫流するのは、女主人

公深雪の恋の情熱であり、正本に掲げる場割全十四場中、十場に深雪は登場する。「浄瑠璃に先行する歌舞伎の「けいせい筑紫嶽」では、「生写朝顔話」ほど深雪の出番がな」く、浄瑠璃は「量質ともに、女主人公深雪の恋物語として作られ、」対する阿曾次郎（駒沢）も、例えば「妹青山」の久我之助と比較して、「天下国家の大事に関わる浄瑠璃の男子としては異例な、恋への真剣さを見せる」などと、恋を主軸に置いた特徴ある浄瑠璃として、本作を捉えている（一九頁）。さらに、読本や歌舞伎と比較しての浄瑠璃作品の特徴として、「読本『朝顔日記』は宮城阿蘇次郎を、誕生から退身まで、一代記的に丁寧に描き、当然恋以外の話に多くの紙数が充てられる」「二方浄瑠璃では、十四場中駒沢が登場するのは七場、深雪の十場に対し、やや薄い扱いである」こと、また、「宿屋」で深雪が駒沢の前で弾くのが、読本は三味線であるが、浄瑠璃は琴で、哀れに美しい女主人公の貴種流離譚に、一層の演出効果を挙げている」こと、同場で「深雪が駒沢の前とは知らずに、恋人への思いの丈を述べるくどきも、読本にはなく、歌舞伎に原型があるとはいえ、抒情味豊かな詞章は浄瑠璃の独擅場である」ことなどが指摘されている（以上、二〇頁）。

(8) なお、「浄瑠璃は読本の太筋に添いつつ、事実上の劇的な最後の場面である「大井川」に、悲劇的幕切れを用意すべく、強引に徳右衛門の忠死を挿入した」とされる（注（3）に挙げた共同研究第八章、内山美樹子氏「二十世紀中・後期（一九五七～九五）の文楽「生写朝顔話」」（二二八頁）。前論で「闇桜」と比較した、浄瑠璃『浄生写朝顔日記』（明治二四・一・二二 金桜堂）の当該箇所本文については、前論注（27）参照。たしかに前論注（16）に紹介した明治二十三年発行の読本『美人情朝顔日記』の本文では、深雪の目の回復は、「産神を祈り朝夕冷けき水にてこりをとりし故に自ら送上も下りしか心地爽に御神の恵にて両眼明き侍りぬ」（八〇頁）というように描かれる。だが、明治期に於いて明らかに浄瑠璃の本文に依拠した「朝顔日記」を踏まえての発言が見られる。注（4）に挙げた『読売新聞』明治八年九月二十五日の国太郎の眼病についての記事では、「甲子どしの男の子の生血でも取ってやりたいねエと浮気娘などが心配して居りますが」とあり、注（5）に挙げた明治二十四年発行の小説『今深雪』では、女主人公の眼病について「大明渡来の目薬に、甲子男子の生血を漉ぐやうな即座の平癒も覚束なし」（七丁表）といった文言が見える。これらの例から、明治期、「闇桜」発表時までの期間に於いて、浄瑠璃の詞章が一般

に浸透していたことが窺えるのである。

- (9) これは必ずしも「朝顔日記」に限定されない。かつて拙稿「一葉小説と同時代環境」『論集樋口一葉Ⅱ』(平成一〇・一一・二五 おうふう) 注(21) 一四九～一五〇頁) に於いて、「闇桜」(下) 末尾の部分の出典として指摘されてきた『新古今和歌集』所載の能因法師の歌について、恋の妄執をうたう道成寺ものの歌謡の中に取り込まれて流布していたことを指摘した。「朝顔日記」のように「闇桜」で直接作品の文言が引用されているわけではなく、また、大団円で幕となるか否かの違いもあるが、こうした道成寺ものや「闇桜」(上) で良之助が千代をからかう際に口にしたのぼせている八百屋お七など、「闇桜」の背景に潜まされている作品に於いても、恋に執着する女性の積極性が見て取れると言えるだろう。
- (10) 屋木瑞穂「樋口一葉「闇桜」の位相——『筒井筒』変奏——」『近代文学試論』第三八号(二〇〇〇・一二・二五 広島大学近代文学研究会) 六頁。

- (11) 「闇桜」及び後出の「たま櫛」の引用は、前論同様初出により、以下頁数のみ示す。初出誌『武蔵野』は、『複製版 武蔵野』(二〇〇四・九・一 雄松堂出版) によった。

- (12) 注(2) の拙稿、七七頁参照。

- (13) 塚本章子氏は、千代が、自分が良之助に相応しくないと思い悩む「その意識の背後には、互いに尊敬し合い、相談相手になる「学識」のある女性(中略)を求め、「自由な恋愛」を夢見る、知識人男性たちの描く「理想」が、渦巻いていた」とし、それが、「恋」を阻むものとして彼女を脅かしている」と言うが、良之助は〈先進的知識人〉であると強調して描かれているわけではなく、彼の「理想」が作品内で語られることも一切無い。塚本氏は、「学問」の匂い、あるいは「英語」の匂いが、千代からは全く感じ取れない」ことから、千代の通う学校が「当時の中心的存在であったミッシェン系の高等女学校とは思えない」と言うが、作品内では「今の世の教育うけた身」(三頁)とあって、近代的教育を受けていることが明言されている。また一方、良之助の通う「何某学校」(二頁)も帝国大学であるという明記がないところから、彼をそこまでのエリートとして設定しようとしていない作者の意図が見えるし、英語の匂いがしないのは良之助も同様である。そもそもここは千代の妄想が展開されて

いる箇所なので、千代自身が冷静でもない。平常時に彼女がそういった問題で悩んでいるのではない以上、塚本氏の指摘のように読めないのではないか。塚本氏の論は、『樋口一葉と斎藤緑雨——共振するふたつの世界』（二〇一一・六・三〇 笠間書院）第二章第一節「闇桜」考——同時代の「恋」をめぐる言説の中で——「一九〇二・二二頁。初出は『国文学攷』第一六二号（一九九九・六 広島大学国語国文学会）。以下、塚本論文と略記する。

- (14) 藤井公明「二葉小説の文章」『二葉全集』第七卷（一九五六・六・二〇 筑摩書房）八〇〜八三頁、山根賢吉「二葉初期小説覚え書」『学大国文』（一九六八・一二 大阪教育大学国語国文学研究室）初出、『樋口一葉の文学』（一九七六・九・一五 桜楓社）所収、九七〜九九頁など。ただし、本論文で指摘するような「闇桜」との違いについては言及されていない。

- (15) 塚本論文では、「男が出世の途上にあること」と女主人公の学歴の落差を「闇桜」との共通点として挙げている（二一六〜二二二頁）が、良之助の出世は千代の見る夢として描かれているに過ぎず、梅二郎のように「英学を修め」「往々（やむ）は国会議員となり馬車で国会議事堂へ出かけやうといふ下心」（第一回、一頁）を持っているわけでもない。何より良之助は毎日のように千代と親しく遊んでおり、塚本氏が指摘する同時代小説の男性たち（梅二郎や逍遙の「可憐嬢」「明治二〇・一二 吟松堂」の登場人物新作など）のような、相手にも相応の学問を求める確固たる結婚観を持っているわけでもない。

- (16) 注（14）に挙げた山根氏の論文（九九頁）など。

- (17) 塚本論文に、「対醜體」には「恋心を主体化し、その心の変化をつぶさに辿ろうとする言葉はない」との指摘がある（二二二頁）。塚本氏は、「対醜體」を「さらに膨らますかのように、恋する者の心の葛藤を描こうとした「闇桜」に、このテキストの命といってもよいものを吹き込んだ」作品として、露伴の「風流悟」『国民之友』第一二七号付録「藻塩草」（明二四・八・一三 民友社）を挙げている（同右）が、女性側ではなく男性側の言説であること、「闇桜」に見られるような恋による煩悶が現実に影響を及ぼし、果ては周囲を翻弄する、といった展開が見られないこと、「風流悟」に於いて男女の間に設定されているほどには、現実社会に於ける地位や財産などの懸隔が千代と良之助には見られないこと、などから、単純に比較するのが難しい作品である。

(18) この箇所、「闇桜」未定稿B（注（2）の拙稿参照）では、「我れ恋ふ人」とある。『樋口一葉全集 第一巻』（一九七四・三・二〇 筑摩書房）一三頁。以下、同全集を『全集一』というように略記する。

(19) 同様に、「闇桜」との関連が指摘されている（注（14）の山根氏論文（九七～九九頁）など）紅葉の「恋のぬけがら」『都の花』第五〇～五八号（明治二三・一一・二～二四・三・一 金港堂）との差異も明確と言える。同作品は、隣同士の幼馴染みで将来の結婚も想定されていた恋仲の主人公たち（お初と千之助）が、千之助の突然の奉公、その後の父親の死と破産、出家といった次々降り掛かる苦難の中、手紙を届けたり寺に会いに行ったりというお初からの働きかけもあり二人は成就を願いつけるものの、最後はそうした交際が寺で問題視され、千之助が信州の山寺に学問修業に出されることで最終的に二人は引き裂かれる。

(20) 本論文に於ける『古今集』の引用は、すべて『国歌大観』により（恋二所収五七二番、恋一所収五六番）、『古今和歌六帖』からの引用は、『続国歌大観』による（第五、七六番、『新編国歌大観』では二七三〇番）。

(21) 例えば菅聡子氏校注、新日本古典文学大系明治編『樋口一葉集』（二〇〇一・一〇・一五 岩波書店）では、七頁脚注二一。

(22) 関礼子氏は、この夢の中の千代と良之助のやり取りについて、「夢のなかの出来事とはいえ、十六歳の少女の欲望のなまの姿を率直に表出している」「当時においてはかなりのセクシュアルな描写」と述べている。「縫ひとゞめ」る心——『闇桜』『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』（一九九七・四・一 新曜社）二三四頁。右引用箇所の後者の指摘については、現時点で検討できる材料を持たないので、今後の課題としたい。

(23) 満谷マーガレット氏は、千代の夢について「何も気づかない彼は依然として千代を妹として眺めて」おり、誰故の恋かと「問う良之助は千代の愛を拒否して、〈兄〉として〈妹〉の彼女をもう一人の男に渡そうとしている」と言うが、背を撫で、顔をのぞき込み、手を取るなどの身体の接触を良之助の方からもしていること、千代の様子を見ていれば恋しているのはわかるという発言からの「誰れゆゑの恋ぞうら山し」という言葉などを見ると、千代の物思いに一切気づかない現実の良之助とは明らかに異なっている。だからこそ、千代もそれに触発されて本心を打ち明ける寸前にまで至っているのであり、満谷氏の読み方には疑問が残る。「狂気」と青春不在——『闇桜』を中心に「『国文学』第三九卷一一号（一九九四・一〇・一〇 學燈社）八〇

頁参照。

- (24) 山田有策「日記と小説のはざま——虚構としての二葉日記」『国文学』(一九八〇・一二 學燈社) 初出、『深層の近代——鏡花と一葉』(二〇〇一・一一・二五 おうふう) 所収、二一八〜二一九頁。
- (25) 一葉の和歌の引用は『全集四上』(一九八一・一二・一〇) による。一六七頁。
- (26) 島内裕子氏は、二葉の恋愛観と徒然草——初期の作品を中心に——『放送大学研究年報』第一〇巻(一九九三・三・三〇 放送大学) に於いて、「恋百首」と「闇桜」との関連を整理している(二八一〜二七九頁参照)。確かに指摘の通り「玉すだれまぢかきほどこに住ながらおもふこころをいふよしもなし」(二〇番「二所恋」、『全集四上』一六八頁)や「あし垣のまぢかきかひもなかりけりへだてゝのみも物をおもへば」(二五番「近隣恋」、同二六九頁)と、「闇桜」(中)の千代の良之助を意識しての煩悶や、「逢とみし夢は跡なくさめはてゝ更に人こそ恋しかりけれ」(九二番「夜中思出恋」、同二七三頁)と、同じく千代が良之助を夢に見るシーンは、具体的に内容が重なりと言えらる。一葉はこれら和歌で詠んできた断片的なモチーフを各所で利用しながら、それだけではなく古典から同時代までの文学作品なども意識し変化を加えながら小説を造形していったと見られる。
- (27) 『全集樋口一葉① 小説編一』(一九七九・一一・一 小学館) 所収、「作家一葉の誕生まで」二八一頁。引用は、復刻版(一九九六・一一・一〇) による。
- (28) 明治二十五年二月二十五日、田中みの子宅で行われた数詠み会で一葉が詠んだ歌。数詠6「かずよみ詠草」二五番、『全集四上』所収、四四三頁。
- (29) 注(22)の関氏論文では、千代の、「病身とひきかえに獲得された心の強さ」「積極性」が指摘されている(二二七〜二二九頁参照)。
- (30) 鈴木二三雄「闇桜」の発想と近代性『立正大学国語国文』第四号(一九六四・八・三〇 立正大学国語国文学会) 三二〜三三頁。
- (31) 『全集三下』(一九七八・一一・一〇) 七二七頁。全集に付されている校訂の記号の類は省いた。

(32) 山田有策氏は、「闇桜」を例にとってもその世界は一葉の内面に深く根差しているとはとうてい考えられない」と言う。「雪の日」についての一考察『東京学芸大学紀要第二部門人文科学』（一九七六・一〇）初出、注（24）の前掲書所収、二三〇頁。また、島内裕子氏は、注（26）の論文に於いて、一葉初期の恋愛小説は、「半井桃水との出会いと、それに引き続く桃水自身への一葉の恋愛感情に基づくものではなく、一葉が「萩の舎」において学んできた古典文学や和歌文学の世界に負うところが大きいのではないか」と述べている（二八一頁）が、本論で見てきたような「闇桜」の特色は、和歌の素養だけからは出てこないのではないかと考えられる。

(33) 拙著『一葉文学の研究』（二〇〇六・三・二四 岩波書店）、拙稿「〈烈女幻想〉の揺らぎ——樋口一葉「やみ夜」再考——」、『国語国文』第七六巻第五号（二〇〇七・五・二五 京都大学文学部国語学国文学研究室）等参照。

(34) 後藤幸良『『闇桜』と平安朝物語——〈女の物語〉の始まり』『相模国文』第四二号（二〇一四・三・一〇 相模女子大学国文学研究会）。古典の物語や八代集から近代に至る迄の和歌との関連を論じている。

（本学教授）